

# 誕生日に母を語る



誕生日は年に一度自分を産んでくれた「お母さん」を思う日…。

## 母からももらった愛を私も子どもたちに紡いでいきたい

安藤晴美(32歳・一宮市)

4年前、自分が「お母さん」になってから、自分自身の中に母親の姿を見る機会が多くなった気がします。

煮物の味つけ、掃除の手抜き、洗濯物のたたみ方、電話口の声、子どもの叱り方で、時折ふとしたことから、恥ずかしながら、22歳まで実家に住んでいながら家事の手伝いもせず、パラサイトしていただけた娘でした。なので、家族と離れて暮らし始めたときは、何かにつけて母親のやっていたことを必死に思い出し、また何度も電話で尋ねていました。

そして長男が誕生。するとおむつ替え、授乳、おんぶの最中に、私の足を持っておむつを替えている映像や、母のおっぱいを吸っている映像、母の肩越しに見えた風景などがささーっと蘇ってきました。睡眠不足ゆえの幻想だったのかもしれないが、とても不思議で懐かしい感覚でした。一番懐かしさを感じたのが、母の子守唄。「あのこはだれだれでしよね」と、実際に長男を抱っこしながら歌う、母親の姿。

きつと私も、あんなにやさしい表情で、大切に育ててもらったんだらうなどと改めて感じ取ることができ、感謝と幸せに満ち足りた気分でした。

現在、4歳の長男、2歳の長女、生後5か月の次男。今、起きてくる出来事は、成長とともに彼らの記憶から薄れていくのだろうけれど、今度は私が子どもたちに、「お母さん」として渡せるもの。モノでも学歴でもなく、それは「愛」。記憶の片隅に、感覚としてたっぷり残せるようにしたい。母からももらったたくさんの愛を、子どもたちへ紡いでいきたいと思っています。

## なんといっても 家族の団欒が一番!

text: 木村 乃  
bizデザイン株式会社 dk@biz-design.co.jp

家族の団欒。家族がみな揃って食事をする。一緒にテレビを観たり、おしゃべりをしたりする。何気ないひとときだが、ふっと幸せを感じることもある。

ぼくは女房と一緒に小さな会社を経営している。顧客との交渉事、資金繰り、切羽詰まったスケジュール。2人して頭を抱えることもしばしば。悩みに大きい、小さいはない。ちょっとでも悩み事があると、心のどこかに何かやっかいなものがへばりついているような気持ちで落ち着かない。

そんなときの家族の団欒。「どうだ? この幸せに比べれば、仕事上の悩みなんてずいぶんとちっけなことのようにならないか?」と自分に言い聞かせてみる。

すると、「確かに。明日は明日の風が吹くさ」と、割り切った気持ちになれる。

家族にはそんな不思議な力がある。仕事で悩むことがあったら、居酒屋でクダを巻いていないで、まっすぐにウチに帰ってみよう。リフレッシュすれば、明日も元気に働けるはずだよ、お父さん。

## オババの育児日記

今さらだけど、お母さんはスゴイ!

会社に孫のたっくん(拓斗4歳)と、とうま(斗聖11か月)が来ると、編集部の青柳、金子、岩佐、私と、4人の大人たちが、取っ替え引っ替え遊んであげる(もらう)。



ボーリング、野球、サッカー、おままごと、ミニカーサーキット…。たっくんはそれぞれ順番に私たちを相手にし、最近では、ついこの前まで赤ちゃんだったとうまが一人前に仲間入りし、子どもの成長にはビックリだ。

しかもちょっとでも手を抜こうとすると、たっくんから「ちゃんとやっつてよ」と指摘される。

小さい2人が帰ったあと、4人がどうなるか…。青柳は無言で仕事をし、金子はため息をつき、岩佐は放心状態。そして私はボタンキュー(死語)と、ソファーになだれ込む。1秒も休みなしに、大人4人を相手に遊ぶ子どもも、怪獣? 天才? 神様?

それにしても、こんな怪獣を日々育てているお母さんって、本当にスゴイなど、改めて母親の偉大さを感じた。2人どころか、3人、4人、5人…(お母さん大学では10人の子どものお母さんもいる)と育てているお母さんたちのパワーは、どうして生まれるのだろう。

エネルギー消費率も半端ではないはず。しかも365日、24時間勤務。いったいつ、どうやってエネルギーを充電するのだろう。車ならガソリンを入れられるし、風邪をひいても、私なら寝ることができる。でも、子育て中のお母さんは、そうはいかない。ウルトラマンのようにピコピコサインを出して「ウルトラ星」へ。じゃなくって、「お母さん星」に帰って充電ができればいいね。

さて上記の各担当者は、たっくん対策を考えた。それは、だまし菓子ならぬ、息抜き菓子を「ダシ」にする方法。つまり、しんどくなってきたら、たっくんに「おやつにしようか」と声をかける。もちろん、たっくんは2つ返事で、「そうしよう、そうしよう。ちょっと疲れたよ」と、すぐに乗ってくる。

金子はグミ、岩佐はマシュマロ、青柳はチョコ。どうして、いつも同じものを買ってくるのかと思うほど、ワンパターン。3人は、怪獣たちがいつ現れてもいいように、机の引き出しに常時お菓子を忍び込ませている。

ちょっと怖いのは、弟のとうまが、最近やけに青柳に懐いていること。もしかして、もう餌付けされているのかも?

さて私も、コンビニにラムネを買いにいこうと! (藤本オババ)



## お母さんの目線で、お母さんの心で、つくるお惣菜



土佐佐賀産直出荷組合(高知県幡多郡黒潮町) 浜町明恵さん(46歳)



豊かな黒潮の恵みを受けて、美味しい魚がいっぱいの、高知県黒潮町。ハマのお母さん、浜町明恵さんが立ち上げた「土佐佐賀産直出荷組合」では、顔の見える地元漁師から新鮮な旬の魚を仕入れ、働くお母さんにも使いやすいように工夫した、安心安全な無添加の冷凍惣菜をつくっています。

「私を含め、社員はみな子育てをしながら働いている女性。子どもが病気のときや参観日は、1時間でも半日でも休んで、お互いをフォロー。企画も常に主婦目線、どういう下ごしらえがしてあると使いやすいか」など、みなで相談しながらつくっています。

「前職を辞めたとき、次の仕事を探したけれど職がない。ここがお母さん世代の仕事の場になれば、という思いもあるがです。」

\*\*\* 読者プレゼント \*\*\*  
次世代 BOX フルーツ  
3名様(2625円相当)  
葉もの(ほうれん草・小松菜など)約3品目  
+根もの(ジャガイモ・玉ねぎ・大根など)約3品目  
+その他(旬を感じる香味野菜や果菜類きのこなど)約2品目+旬のフルーツ1品目  
合計8~9品の野菜と果物1品が基本です。  
●応募は「次世代BOXフルーツ」と書いて、FAX・メールで編集部へ(締切11/30)。〒住所、氏名、TEL、本紙入手先、感想をご記入ください。

あつげらかんと話す浜町さんには、壮絶な子育て体験がありました。「子どもは男の子3人。長男は高校2年のときに学校でいじめにあつて、不登校、ひきこもりになったんです。この2年半、いろいろなありました。その子が今は立派に大学生になったがですよ。夏に自分で大検を受け、無事この春1年生になりました。」

その頃つくった「きびなごファイル」(土佐の特産・キビナゴのオイル漬け)という商品がさまざまな賞を受賞。「辛い時期に仕事に没頭できたおかげで(ある意味、逃げ場があったから)、息子にストレスを向けることなく接することができたのかもしれない。」

明恵さんのお父さんは漁師で、毎朝2時、3時に起床。お母さんはその前に起きてお弁当をつくって送り出すという生活だったそう。「昔の漁師はみなそうでした。痴呆のおばあちゃんの面倒も見ていた母。布おむつを川で洗い、それから洗濯機で洗うがですよ。そんな母を見て、辛抱すること覚えませんでした。何かあったときには『これぐらい』って

思うがですね。長男が不登校になったときも、何も言わずにあたたかく包み、私にも何も言わずに接してくれた。本当にありがたいことです。」

取材協力 ● にんじん CLUB <http://www.ninjinclub.co.jp/> にんじんホームキッチン <http://www.ninjin-hk.net/>

## 愛(beam)を送りました

池川 明の胎内記憶  
www.1seaple.icc.ne.jp/aikegawa



池川クリニック院長 池川 明

■東京大学医学部大学院卒。医学博士。1989年横浜市に、産婦人科・池川クリニックを開業。「胎内記憶」の研究発表がマスコミで紹介された話題に。著書やDVD多数。

沖繩在住の精神科医、越智啓子先生と本の出版を企画しています。

先日、取材のため日帰りで沖繩に行きました。斎場御嶽(せーふあーうたき)で成功を祈念し、取材に入りました。沖繩で御嶽(うたき)とは、神が降臨し鎮座する聖域のことを指します。琉球開闢の中でこの国が7つの御嶽から出来上がり、その1つが斎場御嶽、七御嶽の中でも琉球王国最高の聖地とされています。その場所から見えた島が「久高島」。そこは琉球開闢に登場する阿摩美久(アマミキヨ)という女神が降臨したという神話の島で、「いざれ行きたいですね」と話しました。ところが越智先生としばらく話していると、どういいうわげか話の流れで、その日のうちに「久高島に行こう!」となつて、急遽、久高島へ向かいました。

久高島は日本に五穀が初めてもたらされた場所とされ、数多くの神話が祭りの中で伝えられています。12年に一度行われる、イザイホー祭りも有名(私は知らなかったけれど…)だそう。

越智先生は、久高島の北端はびやん(カベール)という場所、よくセツションをするそうです。その場所は、琉球の神・阿摩美久が上陸し、一時住んだといわれる伝説の岸辺。きれいな浜辺に洞窟のような穴が空いている場所があり、セツション参加者たちは、そこを通過して「生まれ変わり」を体験するそうです。私もあやかつて生まれ直しをしました。

たった一日で聖地めぐりをしたハードな取材の内容は、来年2月頃に発刊予定です。精神科医と産科医のスピリチュアルな話、楽しみにしててくださいね。その本の中からお得情報を一つお伝えします。

追加取材のとき、「愛のスピードはものすごく速くて瞬時に伝わります。でも怒りとか憎しみは伝わるスピードがゆっくりなので、愛が早く届けば相手に憎しみは届きません」と、越智先生に教えていただきました。

また、愛はエネルギーでピンク色のオーラなので、定量することもできる。そして、愛のパワーは手から渦巻きで相手に届けることができるそうです。ウルトラマンのスペシウム光線ならぬ、手のひらから出る「アイ(愛)ビーム」(beam)ですね、と大いに盛り上がりました。

あの人にも「アイビーム」、この人にも「アイビーム」と、手のひらから愛のエネルギーをたくさん送りましょう。誰か「アイビーム」ロゴつくりませんか?